

仏教・保育・子どもの環境—保育における環境とは、仏教・保育・栽培の関わり—

仏教文化研究所兼任研究員 仙田 考

はじめに

幼稚園教育要領では、「幼稚園教育は環境を通して行うことを基本とする」とあり、また保育所保育指針でも、「保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」とあるように、乳幼児施設の保育と子どもの環境との関わりは不可欠である。また仏教園においては、栽培、食育等を通して「いのちの大きさ」や「感謝の気持ち」を育む活動が積極的に行われている。本稿では、幼稚園・保育園の屋外環境とのかかわり、特に栽培・食育に着目して、仏教・保育・子どもの環境の関わりについて検討する。

一、保育における環境とは

幼稚園教育要領（文部科学省）、第1章総則、第1幼稚園教育の基本では次のようにある。「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」また、保育所保育指針（厚生労働省）では、第1章 総則、2 保育所の役割において、次のように述べられている。「（イ）保育所は、その目的を達成するために、（中略）、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としてい

る。」、さらに、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府）においても、第1章総則、第1幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等、1幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本のなかで、「幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、（中略）、環境を通して行うものであることを基本とし、（後略）」とふれられている。

このように、幼稚園・保育所・こども園における教育・保育は、「環境を通して行う」ことを基本としている。しかし、この「環境を通して行う」幼児教育・保育において、「環境」とはなにを指しているのだろうか。

幼稚園教育要領では、健康、人間関係、環境、言葉、表現という五領域が示され、領域「環境」においては、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」ことを目的とし、かつその「ねらい」として、つぎの三つが提示されている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

さらに、その「内容」として次の(1)から(12)が提示されている。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しきをもつて接し、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする。

- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
 - (7) 身近な物を大切にする。
 - (8) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
 - (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
 - (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
 - (11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
 - (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。
- 領域「環境」の内容として、子どもたちが関わる「環境」とは、自然、物、人間の生活、動植物、文化や伝統、遊具、数量や図形、標識や文字、情報、施設、国旗などが挙げられている。これらは大きく、もの・物、数量や図形、標識や文字、情報、国旗、場・遊具、施設、ひと・人間の生活、文化や伝統、自然・自然、動植物などに集約することができる。
- また「内容」の中で、幾度も繰り返し使われている表記として、「身近」と「生活」がある。このことから、「環境を通しての教育」の「環境」とは、子どもが「身近」な「生活」の中で接するさまざまな「もの」「場」「ひと」「自然」と捉えることができる。
- そして、特に自然との関わりという視点では、内容(1)(3)(4)(5)
- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
 - (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
 - (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
 - (5) 身近な動植物に親しみをもち、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする。

があるが、特に（5）において、身近な動物の飼育や植物栽培に関わることによつて、いのちの尊さに気付く、生き物へのいたわりや大切さのころが育まれる、とある。植物栽培では、種まき・苗植え、お世話、収穫、食へるといふ、保育における栽培・食育活動の子どもたちへの影響が考えられる。

二、保育における栽培・食育活動と仏教保育との関わり

保育において栽培・食育活動は、「自然と触れ、いのちに触れる活動」である。いのちを育て、いのちを頂き、はじめて私たちが生きられることを理解することができる。それは栽培、調理してくださる農家や調理士、家庭の方々に對し、感謝の念を持つことであり、自然の恵みを無駄にせず、最大限活用することを意識することである。

仏教保育においては、次の三つの視点が示されている。（日本仏教保育協会 2004）

- ① 慈心不殺（生命尊重の保育）
- ② 仏道成就（正しきを見て絶えず進む保育）
- ③ 正業精進（良き社会人をつくる保育）

① 慈心不殺

生命尊重の保育についてである。栽培・食育との関わりで考えるとすると、たとえば、

- ・ 自然と触れる…土、植物、水、光にふれること
 - ・ お世話をする…命を育むための世話。光、水、肥料を適度に用意。鳥や虫から守らないと植物は弱ってしま
- い、枯れてしまう

・ 食し感謝する…植物のいのちをいただく。食は人間の生命の源であることを理解し、農家・調理の方への感謝の気持ちを抱く

・自然の恵みを無駄にせず、最大限活用する…資源の再利用、循環。雨水、井水、堆肥づくりなど、自然にあるものを活用

栽培とは自然に触れることである。植物はもちろん、土や泥、水、そして日の光に触れ、自然や季節を感じながら行う活動である。

また、栽培において最も大切なことのひとつは、子どもたち自ら栽培植物への世話にかかわることである。花や野菜、果物、稲の栽培においては、朝の光が当たる場所で、適度な水やり、肥料、間引き、適切な虫・鳥よけを行う必要がある。この日々の努力が、花や実、稲へと繋がるのである。

稲や野菜（そして果物）の栽培では、栽培のみならず、食を行うことができる。稲・野菜は人間が生きる源であり、植物のいのちを頂いて、人間は生を繋いでいくことができる。栽培、食によって、そのことを理解することとともに、稲・野菜を育ててくれる農家の方々、美味しく調理をしてくださる園の調理師や家族の方々に、感謝の気持ちの念を持つことも大切である。

また、自然の恵みをできるだけ活用し、無駄にしないということも、自然を尊重することにつながる。たとえば、雨水を集めて栽培植物への水やりに使用したり、落葉を集めて堆肥を作ったりすることもできる。

自然と関わり、自然を活用し、自然を育て、そして自然の恵みを頂き、自然そしていちあるものへの敬意の念を持つ、ということである。

② 仏道成就

「正しきを見て絶えず進む保育」である。栽培・食育との関わりで考えるとすると、たとえば、

・ 自主自立の精神を培う

自分のことは自分でできるようにする。

・ 収穫を祝い感謝する

収穫祭を行い、収穫野菜のお供えをし、仏様に感謝の気持ちを抱く。

領域「環境」においては、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていく」とする力を養う」ことを目的としており、一連の栽培・食育活動を通して、物事のルールや片付け、掃除などを学び、ひとりの人間として自立して行動できる基礎を培っていくことにつながるのではないか。

また日本では古くから収穫祭の文化がある。農業に関わる人々が、米や野菜の収穫を祝い、仏様にお供えをして、無事収穫できたことを感謝する。

子どもたちも同様を行うことで、栽培植物が日々生長し変化する様子に気づく時のうれしさ、みなで共同して収穫する時の楽しさ、調理された料理を食べる時の美味しさなどを実感し、そして、収穫物のお供えをしてあらためて、仏様が、子ども自身そして栽培植物を見守ってくれたことへの感謝の念へとつながることが考えられる。

③ 正業精進

「良き社会人をつくる保育」である。栽培・食育との関わりで考えるとすると、たとえば、

・ 栽培、食育活動から生活の知恵を学ぶ

活動を通し、栽培や調理方法、季節の行事、共同作業などについて学び、自らの生活につなげていく。

栽培・食育活動によって、栽培・調理方法などの知識を学ぶことができるとともに、その活動はさまざまな人々の共同、協力によって行われる。互いの助け合いにより社会は支えられており、社会性の育みや、ひとのために生きる

ことへの理解へとつながることが考えられる。

おわりに

領域「環境」と仏教保育とのかわりについて、栽培・食育活動との関連から検討を行った。子どもたちが園生活の中で身近な環境とのふれあい、ここでは園での栽培・食育活動を通して、いのちあるものへの思いやり、感謝の念、自立心、協力の気持ち、そしてそのための行動力への育み、それらは仏教園での仏教保育の精神と十分繋がることが考えられる。

【謝辞】

本稿に当たり、資料提供にご協力いただいた園の先生方、並びに本稿の園庭環境での活動に関わられたすべての方々に、深く感謝の意を表します。

【注】

本原稿は、平成二十九年年度仏教文化研究所公開シンポジウム「仏教に学ぶ保育の原点」（開催：平成二十九年六月十日、鶴見大学会館）にて、執筆者が行った「仏教・保育・子どもの環境」の講演を一部修正し作成している。

【参考文献】

- (1) 日本仏教保育協会（編）（2004） わかりやすい仏教保育総論 チャイルド本社
- (2) 厚生労働省（2017） 保育所保育指針 厚生労働省
- (3) 文部科学省（2017） 幼稚園教育要領 文部科学省

① 慈心不殺
【参考写真】



1. 田植え：どろと関わる



2. 餅つき：食し感謝する



3. 実が成る：適度なお世話



4. 収穫：植物のいのちを頂く

- (4) 内閣府 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 内閣府
- (5) Ko Senda (2015) Buddhism preschool and the grounds in Japan. 4th International School Grounds Alliance Conference. Oral presentation. Bali, Indonesia.
- (6) 仙田考 (2016) 仏教幼稚園における園庭環境についての一考察・園児のあそび、学び、生活環境の向上や仏教保育に繋がる園庭改善事例から。鶴見大学仏教文化研究所紀要 第21号 pp. (1) - (20).
- (7) 仙田考 (2017) 保育における栽培・食育活動と園庭環境についての一考察・仏教保育との関連を踏まえて。鶴見大学仏教文化研究所紀要 第22号 pp. (1) - (14).
- (8) 佐藤達全 (2014) 仏教保育と食育についてー「いのち」を大切にすることを育てるためにー 鶴見大学仏教文化研究所紀要 第19号 pp.164-187.



5. 水やり：自分の鉢に世話を

②
仏道成就



6. そら豆むき：調理前の共同作業

③
正業精進



7. 正月飾り収穫：季節行事の学び